

色の好みと性格についての考察

北 浜 淳

この調査をした動機は生徒が教室の中で静物画をかいたとき、バックの色を塗るとき、はじめから計画的にかくよう指導するけれども、結果的に見ると、50人中の10乃至15名位は背景には好きな色を塗った。と考えられたような傾向がみられたからである。これを徹底的に追求したいと思って、いろいろと指導法を工夫してみたが、背景の色がわるいために絵を不調和にしているものが跡を絶たない状態にある。あるいはパレットの一隅に残った絵具を無意識に塗るの难道うかとも思ったりしたが、『好きだからこんな色にしたのです』とか、よいと思ったからですというのものもあるのだが、極めて不調和なことも、ままあるので困ってしまう次第である。古くから個人が好む色によって性格も判断されるように、いわれてはいるが服飾などは、都会地は開放的に自分の好みに応じて、それを用いるとしても、まだまだ地方の風習とか儀礼的なものとか、遠慮とかが働いていて、全部の人が自分の好みを生かしているとは考えられないのである。

日本色彩社出版の岩崎喜久雄氏の著書にアメリカの Du Pont 社の色彩顧問をしている Faber Birren 氏のアメリカの大人に対する調査研究の抜萃があったので、それを手がかりとして着手した次第である。

ここには次の10色についてその色を好む人の性格を詳しく述べている。色の分類はいろいろと論の多いところだが、他に比較検討するものがないので、この10色についてあなたはどの色が一番好きですかとたずねそれにマークさせた。桃。赤。橙。茶。黄。緑。青緑。青。黒白灰紫。の10色に限りその各色の好みによる性格の

概況は次のようである。(以下抜萃)

黄色の好きな人の性格

- 1 黄色は孤高ともいうべき気高い色で、知識人にしばしば好かれるが、男より、女に好かれる。
- 2 黄色を好む人は風変わりな流行にとびつく方で、多くは改革論者である。
- 3 第一印象は極めて冷たく、魚のような感じを与える。いくら賞めてもうれしそうな顔をしないし、折角、仲よくしょうと話しかけてもそっぽを向くからである。喜怒良樂を面に表さずといった感じ、怒りもするし、阿諛追従や、えこひいきを喜ぶことも人並である。だからあまり、この人を怒らせるとあとで小っぴどい目にあうことを覚悟しなくてはならない。
- 4 黄色型は、態度の冷淡な傾向はあるが、一旦つき合ったら氷久の友情を結ぶことのできる人である。
- 5 秘密を守ること固く、特に黄色愛好者、すなわち彼自身のような孤独な娘と一番うまくつきあってゆく。

赤色の好きな人の性格

- 1 赤色型の人々は生活力が旺盛である。人間的な真摯な潑刺たる彼等は、人の世の楽しみを求め、それを見つけ、それを享樂しつつそのために人から羨まされて生活を営んでゆく。
- 2 赤のムードは高所から低所へ大きくスキングして又もとへ帰ってゆく。若し彼が罪を犯したとすると彼はそれを白状しなければ居て

も立ってもいられない質だ。その代り感情も激しいから、からかったりするとなぐられるかも知れない。

- 3 赤の好きな男（概して男である）はフットボールの選手にはなれるが、将棋のようなものはやらない。彼は必要な鋭敏さとか、忍耐力とか、物事に専心するという能力は持っていない。
- 4 赤型は他人の感情をふみにじることをやり兼ねない。しかし他人を鼓舞してゆく。若し、戦に行けば真先に突進し、国のために喜んで死んでいく。
- 5 この人は生活によって左右される。

桃色の好きな性格

- 1 桃色は赤の淡い色であり、絶対女性の色である。赤色型のように桃色型は生活を喜び、自分のまわりの世の中の動きに興味を持つ、しかし、それはあくまでも、やさしい社会のことで、戦争などは大嫌である。
- 2 ピンク好きな女性は蝶よ花よと保護、愛育された人である。彼女は親切で、優雅である。
- 3 この色は女性の色で、男のくせに桃色が好きだという人があれば余程どうかしている。

茶色を好む人の性格

- 1 大地の色であり、他の色に興奮しない人々の好む色である。浮わついた性質とか、強くて熱情的な性質とかを短所と考える人であくまで中庸居士である。
人間がしっかりしていて信頼ができ、几帳面でそしてよい意味でスロモウである。
- 2 信用して金を貸してもよい人で、金銭の取扱いよく訓練されているし、自己の金に仕末屋であるから間違いはない。
- 3 このタイプの人は間違ったことが嫌いであるから、人の間違いに対しても厳格である。

青緑色を好む人の性格

- 1 Bue Green は理智的な、清楚な、順調に育った婦人によって、しばしば選択される色である。愛することより、愛されることを多分に必要とする婦人に属する。

2 決して酬られることを期待しないで、人に寛大にして親切な人、その態度はチャーミングにして甘美です。

- 3 しかし、非常に感じ易く且つ小うるさい。物ごとは斯くあるべしという固定した観念の故に、この型の人とはなかなか仲よく暮していくのはむずかしい。

緑色の好きな人の性格

- 1 赤と青の中間に位する緑の性格は、社会のバランス・ホイールであり、社会一般の慣習の忠実な弁護者である。
- 2 彼等は過度に熱烈でなく、といっても慎み深い方でもなく、その証拠に他人のスクラングルを話題に与えると相当なものである。しかし、それによって自分自身が窮地におち込むようなことは避ける人である。マージャンクラブにもゆくし、読書もなかなかやるし、教会にはキチンと通うし、学校の先生になったら、なかなかよい教師になる。
- 3 緑型は、男も女も規則を作ることを好み、その規則をよく守る。交際好き、旅行好きそして贅沢も好きだが、節度があつて虚飾をともなわない。
- 4 心は明るく、思いやりが深いから誰とでもウマが合う。

青色の好きな人の性格

- 1 青は精神生活の色で、赤型の人が世界に向かって展開しようとする代りに、世界を彼等自身の中に引き入れようとする人の好む色である。
- 2 非常な常識のある人、知識人となることも出来るが概して怠惰な保守的な、あと一息というところでやめてしまう人である。暗青色が好きだという人は極度に保守的である。
- 3 このクラスの人とは逆口上をこしらえたり、過失や感情的虚飾に合理的説明のコナをまぶしたりすることは頗る名人である。
- 4 慎重で、臆病で、他人をして先ず、しゃべらせたりする傾向が顕著、その代り競輪にこったり、パチンコ屋に毎日通うようなことは一切しない、彼等は、ようき準備者、よき実行者、よき計画者である。

紫色を好む人の性格

- 1 世の芸術家は紫は最も神秘的な色だという。生れながらにして、この色が好きだという人は稀である。紫に対する真の愛は、天賦の才人間精神の深奥を見透す能力、理想のためには、必要とあらば生命をも犠牲にしていとわないという。
- 2 極く普通の人々が紫が好きだという人はそんな振りをしているだけで、そんな人に限って倫理学、宗教、美術等の講演によく出かけるが、生命とは何ぞやということについては何も解らないで帰ってくる。
- 3 自分の外界に存在するありとあらゆる世界に強い興味をもつ。問題の解決策を考えることが好きだ。しかし、めったに解決したことはない。

彼は自分自身常に充分満足しているからである。

橙色を好む人の性格

- 1 すべての人の友達になれる性格である。インテリ、やくざ、囚人、坊さんどんな人でも同じように付き合いをする。パーティが大好きで、おいしい食物に眼がなく、人のかけ口も嫌いじゃないというより、好きなほう。
- 2 沢山の人のことについては少ししか知らないし、一人や二人のことについてはあまり沢山知らない。

黒白灰色を好む人の性格

- 1 三つの無彩色のどれを好むかによって、更に性格が説明される。
- 2 白を好むならば、子供の時にしたような自然生活と同じ種類のものをつづける傾向がある。フランクで、純真で、あるがままの世界を受け入れることを好む、
あるいは少くともその方式を好むに違はない。
- 3 黒を好むならば、その人は公私二つの性格を持つ人である。黒型の人々は人々に強い印象を与えることを好み、詭弁を弄し、神秘を喜び、熱情的であり、恐らく自分の真の性質の前に困惑しているだろう。

- 4 灰色を選ぶならば、實際上自分自身を改造する。すべての回答を知った振りはしない。起ったことと考えがその人の見解を変更していく。嘗ての自身よりも遙かに保守的に、自身の将来を支配しようと決意する人である。

以上のようなことであるが、人間の性格をわずかに10種類位の型にあてはめることは、勿論できないことであるが、これを糸口として展開してみたいと思う。

又、ビレーン氏の研究調査は大人を対称としているのだが、この報告は中学生しかも我が校の実態だけについて調べてみた。

第一表 学年の男女比較

	1 年		2 年		3 年		合 計
	男	女	男	女	男	女	
桃	1	6	3	5	19	8	42
赤	5	0	3	1	2	2	13
橙	4	0	1	1	6	4	16
茶	2	2	3	5	0	20	32
黄	14	4	12	10	11	3	54
緑	28	12	42	10	34	7	133
青 緑	19	8	13	8	15	4	67
青	16	19	17	8	15	14	89
黒白灰	3	10	5	15	5	20	58
紫	5	3	8	7	4	1	28
な し	23	15	12	9	7	2	68

第一表について考察してみると、

数字の上から一番多いのは緑色でこれにつぐものは青であり、その次は青緑である。

これ等のことをビレーン氏のことに照らすに、生徒に対する調査（どんな人柄の人になるのがもっともよいと思うか）の回答を対称してみることによって本校生徒の一般的性格と考えることができると思う。

- 1 親切で思いやりのある人 89
- 2 いつも明朗である人 84
- 3 人を愛し、愛され、また人に好かれる人 82

となっているから、緑の性格の(4)の項の心は明るく、思いやりが深いから誰とでもウマ合うというのと一致しているようであり、青の(2)項常識のある人、知識人となることも出来るが、概

して怠惰な保守的な、あと一息というところでやめてしまう。というところにもほぼ合致しているように考えられる。

又青緑の性格の(1)項愛することより、愛されることを多分に必要とする。又、(2)項の酬られることを期待しないで人に対して寛大で親切ということも、この学校の生徒の長所である。

つまり(調査)学校の気風でどのような点がよいと思うかの問いに対する生徒の回答の中で多いものから順に上げると、 1 明朗である。 2 仲がよくみながよく協力する。 3 親切である。というようなものとも合致すると考えることができる。

派生的な発見であるがこれまで写生の際背景に緑色の冴えた色や、青の絵具で周囲の白を無意識のように埋めてしまった理由も彼等の要求の中に立入って考えてみれば深い根源的なものがつまり泉の源が発見できたように考えられるのである。つまり、静物画等を描く場合には自分の好む色をどこかに強く表していくのが自然であるから、素材を選ぶ場合にも、背景の構成にあたつても彼等の意志が実行できるような準備と配慮をしなくてはならぬと考えたことである。

次は最も少ないのは赤であったが、赤にしても橙にしても極めて少ないのである。1年女子には赤も橙も一名もいないし全生徒を通じてもその数は少ない。つまり熱情的で旺盛な生活力を持つ感じの生徒は少ないし、周囲のものが何をしても無関心なものも極めて少ないからその数字も一応うなづけると思う。

この調査で一寸異様に思ったことは女子についてはさほどにも思わなかったが男子について桃色を好む生徒が相当あったことであり、それ等の生徒を個々についての観察と、照合してみると一般に気がよわく、やさしい生徒であることと、三年生の男子の19名の中8名づついるクラスが二つあることで、クラスの雰囲気 これらの生徒によって大きな変化をしている原因になっていると思われることである。他のクラスには一、二名しかないのに、気風が構成されている感がある。又、反対に不動形で中庸型と考えられている茶色を好むというのがこの学年

の男子に限って一人もないことも考えさせられるところである。又逆に学年を追うて桃色を好む人数が増加していくのは健全な現象であるのかも知れない。黒白灰色のつまり無彩色の美しさは彼等の好むがままにしておけば容易に育たないことで、これまで幾度か経験したことではあるが、今回の調査では特に女子において僅かつつではあるけれども増加していくことがわかり、更に男子においては少くない数ながら黒白灰の美しさに気のついたものが少しあて増加していくようである。つまり、無彩色の美しさは年令的に次第に理解されていくものであると思われ、特に女子が色の感情が先に進んでいることと考えてよいのではなからうか。

紫の色の好みは三学年においては極めて少ないのだがこれも活動力の盛んな青春期にはあまり好まないのも道理だと思われる。特に女子は一名しかいない。

最後にわからないとか白紙のまま回答しなかったものがどの学年にもあり、その数が、学年の進むに従って急速に減少していることは、次第に自己というものの判断が確立していくことを示すものと解される。又、中には自己表現を極度に嫌らい、意志表示や内包するものの発表をきらう生徒もいるのでこの点にも性格調査の大きな難関があり、問題があると思われる。好みは次第にはっきりしてくることは事実であるし、又実際大人でも一つだけということことに

第二表 男子の学年による変化の比較

	1年男子	2年男子	3年男子	合 計
桃	1	3	19	23
赤	5	3	2	10
橙	4	1	6	11
茶	2	3	0	5
黄	14	12	11	37
緑	28	42	34	104
青 緑	19	13	15	47
青	16	17	15	48
黒白灰	3	5	5	13
紫	5	8	4	17
な し	23	12	7	42

第三表 女子の学年別の比較表

	1 年女子	2 年女子	3 年女子	合 計
桃	6	5	8	19
赤	0	1	2	3
橙	0	1	4	5
茶	2	5	20	27
黄	4	10	3	17
緑	12	10	7	29
青 緑	8	8	4	20
青	19	8	14	41
黒白灰	10	15	20	45
紫	3	7	1	11
な し	15	9	2	26

かぎらない者も相当あるだろうと思われる。従って今後考えられる問題は一色だけの好みによらずに配色表の好みによる判定の標準があれば

と考らるのである。こうした色の好みも次に時間的に変化するものと考えたから最も変化すると思われる一年全体についてその変化の状態をしらべてみた。

最も変化のはげしいと思はれる 1 年生全員について調査したところ 200 名中二回の中何れかにわからないと答えたものを合せると 63 名にも及んでいる。全々好みの色が変っていないものは残りの 137 名中 57 名だけで男子はこの中 28 名女子は 29 名であった。

好みの色は一色に決めることは青少年にはまだ困難であり、変化していくものであることもわかったが、継続的にその変化をみつめ、他の性格テストと照合しながら、研究を進めたいと考えている。